

László Tabár, Peter B. Dean (著)
南 学 (訳)

マンモグラフィ読影アトラス

岩瀬拓士

がん研究会有明病院乳腺センター

マンモグラフィ検診がまだ十分に日本に定着していなかった20年近くも前のことではあるが、当時我々が癌を強く疑って生検した石灰化の写真を、講演で来日したDr. Tabárに診てもらったことがある。一見多形性、区域性に見える石灰化ではあったが、彼は即座に良性と診断し、生検は不要だろうと答えたことを覚えている。生検結果が良性であったことを知る我々にとっては大変な驚きであったが、経験を積んだ今ならその診断理由をよく理解できる。当時の診断能力の差を思い知らされた貴重な経験となっている。

本書は、そうしたマンモグラフィの教育活動を世界中に展開してきたDr. Tabárの有名な著書「Teaching Atlas of Mammography」の第4版を訳したものである。第4版改訂を機に日本語への翻訳と出版が現実のものとなった。

原著の大きな特徴は、150例を超える豊富な症例数ばかりではなく、摘出された多くの症例でその病理写真を掲載している点にある。病理写真の中には、立体的な構築が理解しやすいように、標本を肉厚の切片の

まま染色したルーペ像が幾度となく登場する。この特殊な処理による3次元的病理像から、病変が解剖学的にどこにどのような形で存在するのか手にとるように理解できる。解説部分の豊富な病理像は、画像診断の基本を解剖学や病理組織との対比において診断学を発展させてきた著者の基本姿勢を示しているものと思われる。

個々の症例の解説は、現病歴を示すタイトルと身体所見から始まり、次にマンモグラフィ所見を記載、その後、分析、結論、組織診断と続く。分析は結論（良悪性診断と推定される原因疾患）を導くためのポイントをまとめたものであり、切除して病理学的な診断が得られた症例に関しては、病理写真の解説とともに最後に組織診断名が記されている。すべての症例がこのフォーマットに従って記載されているため、知りたい項目だけ拾い読みすることも可能である。最後に「判定」としてつけられたカテゴリー分類は、本邦で用いている検診用マンモグラフィのカテゴリー判定に従ったものであり、訳者がDr. Tabárと確認をとりながらつ

けた貴重な判定となっている。

本書の中で大事な部分がもう一つある。それは番号が振られた多数の症例に埋もれるような形で、各章の最初に掲げられた2-3ページの要約の文章である。円形腫瘍や星芒状陰影に対する読影法、石灰化の鑑別法など、短く、さりげなく挿入されている文章のことであるが、その内容は濃厚で、ガイドラインの数ページ分にも相当する読影のためのエッセンスがここに要約されている。この要約ページを何度も読み、実際の症例を見て、また再度読み返すという作業を行うことによって、少しずつ自分のものとして読影のルールが身についていくものと思われる。

病理学的な変化を想像しながら読影するマンモグラフィの世界を是非体験してみてください。

●A4変型/頁312 図20・写真653/

2014年

定価 本体10,000円+税

[ISBN978-4-89592-766-6]

MEDSi 刊